

三矢君の解釋を評す

安藤正次

私は、もう時間も遅いので止める積りでしたが、加藤さんから御話がありましたから、一言申し上げます。「知」と云ふ言葉について此處で度々色々な方々から御話を承りますが、それ等の御説の立て方に於て、私は少しく異見を有つてゐる點があるのであります。即ち「しらす」と云ふ言葉の意味を證明するに當つて、平安朝の使用法が、常に例に出て參るのであります。平安朝時代に使はれた「しる」と云ふ言葉の系統のもの、例へば、「しりたまふ」とか、「しらせたまふ」とか云ふやうな言葉を取つて、其の平安朝に使はれた意味から溯つて、前の奈良朝時代に使はれた「しらす」と云ふ言葉の解釋に資せようとする。さう云ふやうな論者の御説を度々拜聴しますが、私の考で申しますと、それは、少しく御考へ違ひではないかと思ふのであります。奈良朝時代に、「しらす」と云ふ言葉がある。又、其の「しらす」と云ふことは、概して、天皇が統治遊ばすと云ふやうな意味に使はれて居る。所が、其の「しらす」と云ふ言葉は、勿論、「しる」と云ふ言葉の敬語でありますが、其の「しる」と云ふ言葉と同じ關係のある、「しりたまふ」とか、或は、「しらせたまふ」と云ふ言葉が、平安朝に於ては、統治と云ふ意味からはなれて、そ

れが、或所を領して御出でになるとか、或は、或所を持つて御出でになると云ふやうな意味に使はれて居る。そこで、今、加藤君の御話では、平安朝時代には、「しる」と云ふ言葉が、藤原氏や其の他の人々の事に使はれて居る。殊に、藤原氏の榮華を書現はすに當つて、道長なら道長を天子様に比べて高く揚げて書かうと云ふ意思を以て使はれたと云ふやうな御考に拜聽されましたが、それはさうでなくて、寧ろ、「しる」と云ふ言葉が、奈良朝時代には、「しらす」と云ふ形で、天子様が統治なさると云ふ意味に使はれて居たが、平安朝になりますと、天子様の此の國を支配なさると云ふことに就ては、「しろしめす」と云ふ言葉が盛に用ゐられるやうになつた。「しろしめす」と云ふ語は、統治といふ意味ばかりでなく、「御承知になつて居る」と云ふ意味にも使つてあります。天子様が此の國を統治なさると云ふことにも、平安朝では、「しろしめす」と云ふ言葉を使つてゐる。無論、平安朝ばかりでなく、其の以前にも、その例があります。平安朝には、「しろしめす」と云ふ言葉が、最も多く使はれて居る。さうして、其の他の「しりたまふ」「しらせたまふ」「しる」と云ふ言葉は、或所を支配すると云ふ意味に使はれて居る。是は、「知る」と云ふ言葉の意義が一方からいへば、普遍的になり、一方からいへば局限されて——局限されると云ふと語弊がありますが、「しる」と云ふ意味が、少し低下されて使はれて居るのであります。國守なら國守が、天子様の命を受けて、或土地を支配する場合にも使はれて居る。又或所を自分の領分として居ると云ふ意味にも使はれて居りますが、それは「しる」と云ふ言葉の意味が變つて來て居るの

である。一方には、「しろしめす」と云ふ言葉が、語源的には、「しる」と云ふ言葉から出て居りますけれども、既に、「しろしめす」と云ふ一つの獨立の語形に於て、存在の意義を持つやうになつて來て居る。先程、三矢君のお話にも、「しらす」と云ふのは平安朝に於ては使はれて居ないと云ふ御話がありました。が、それは、無論の事であつて、「しらす」と云ふ言葉は、他の、例へば、「さかす」(聞)とか、「おばす」(佩)とか、「さく」に對して「さかす」とか、「おぶ」に對して「おばす」とか云ふやうな語と同じものであつて、さう云ふやうな、サ行の「す」が附いて敬語を現はすと云ふ形は、奈良朝時代の敬語形であつて、平安朝になつては、オブソリートになつて居る。全く無くなつたと云ふのではないが、平安朝の一般の語法から云ふと、「す」の形に於ける敬語法と云ふものは、平安朝の多數の使ひ方ではなくなつて來て居るのでありますから、さう云ふ時代的の相違を、吾々は考へて見なければならぬのであります。言葉の意義の變遷を考へなければならぬ。一般のものが部分的のものになり、或は高い階級に使はれたものが低い階級に使はれたものになると云ふやうなことがありますから、さう云ふ歴史的の變遷を度外にして、縦のものを横に列べて解釋すると云ふことは、どちらにしても、言葉の本來の意義を解釋する所以ではないと考へます。

三矢さんが、今晚のお話の前提として初めに御述べになつた事、例へば、言葉が違へば、意義にも必ず相違がある、別の言葉のあつた場合には必ず別の意義があると考へなければならぬといふことは、私の考

とは大分違つて居ります。無論、語源的に云へば違つて居る。けれども、或場合の使用の上から云へば、別の語でも同じ意義をあらはしてゐることがあり得るのであります。是は、即ち、言葉の語源的の意義、所謂言葉の本義と云ふものと、言葉の轉用と云ふものと、或は、言葉の本質と、言葉のデリヴェーション、派出と申しますか、言葉の本質と派出とを混同致しますと、さう云ふ風な考になるのではないかと、私は考へるのであります。先程申しました、所謂歴史的の變遷を區別して考へると云ふことと、それから、言葉の本義と言葉の派出を明かに區別して考へると云ふことが、總ての言語の研究の上には缺くべからざることでありませう。「しらす」と「うしはく」と云ふやうな言葉を、語源的に解釋するか、或は、其の場合の使用に就て解釋するか、之を明かにしないで、其の區別の上に基礎を置かずに、色々な議論が出来ます。其のお互の間の議論が、所謂混線する譯ではないかと考へます。嘗て、私が此の席で述べました事に就て、其の後、白鳥博士は、大學の東洋史談話會で、此處でお話なされた事の訂正の御説がありました。が、其の時にも、私は考へたことでありますが、どうも、お互に、言葉の議論をして居つても、皆、違つた方面の事を言つて居つて、それが、お互に徹底しない點もあり、お互に誤解して居る點も出来る譯でありますから、此の點は、言葉の議論をする上に於て、もう少し明かにする必要はなからうかと考へるのであります。

まだ申したい事もありますが、先程申しました通り、餘り遅くなりますから、是だけに致します。